

# 四国方言における「テオル系」アスペクト辞の諸相

——「四国言語地図」より(1)——

高橋 顕志

## 1. 「四国言語地図」

高知女子大学文学部国語学研究室では、1986年以来、四国全島とその周辺部を調査地域とした方言に関するアンケート調査をおこなってきた。

1986年度は、文部省科学研究費の交付を受け(注1)、前後三回にわたりこの地域に存在する中学校に宛てて調査表を発送し、中学二年生男子とその祖父を対象に、表1のような規模の調査をおこなうことができた。調査結果はマイクロコンピュータを用いて地図化することとし、そのための一連のプログラムの作成を開始した。

この一連のプログラムが実用に耐えうるレベルになった時期を見はからって、1989年度から、同じ処理方法によるアンケート調査を、毎年国文学科三年生を対象として開講している「国語学演習」の授業の一環として開始した。初年度は、大学生とその父母を話者とし、表2のような規模の調査をおこなった。

この年の調査は、項目数が多くなり、回収数ははかばかしくなく、せっかくの「地図化プログラム」もあまり用をなさなかった。しかし、多くの項目の、おおまかではあるが、その分布を見ることができ、次回からの項目選定に大きな示唆を与えることができた。

1990年度には、話者を大学生にしぼり、項目数も大幅に削減した上で、回収数をふやす努力をした。結果として表3のような規模の調査となった。

1986年度から開始した我々の「四国言語地図」のための調査は、このようにしてようやく軌道にのり、準備・調査・入力・地図化という一つのマニュアル化されたシステムとして完成を見つつある。

本稿で話題とする「四国言語地図」とは、以上のような歴史の中で完成してきた一連のシステムから出力される一連の「地図群」をさしており、完成された、また公刊された「地図集」を意味するのではない。

なお、本稿では調査としての完成度が高かった1986年度の調査結果をもとにする。

表1 1986年度調査

	発送年月日	回収数	項目数	
			中学生	老年層
一次	1986, 11, 12	480	53	36
二次	1987, 1, 14	424	39	29
三次	1987, 2, 27	322	49	41
		計	141	106

表2 1989年度調査

四 次	調査年月	話 者	項目数	回収数
		大学生	2073	60
	1989, 7-9	大学生の父母	1912	51

表3 1990年度調査

五 次	調査年月	話 者	項目数	回収数
	1990, 7-9	大学生	571	352

## 2. 「テオル系」アスペクト辞

西日本方言には、動詞のアスペクトを表現する接辞として、「動詞の連用形」に「オル(居る)」が直接結び付くいいかた(以下、これを「オル系」と呼ぶ)と、接続助詞「テ」を介して「オル」が続いていくいいかた(「テオル系」と呼ぶ)が存在しているのはよく知られている。基本的に、「オル系」のいいかたが「進行」を表現するのに対し、「テオル系」のいいかたは「完了」の意を表現していることもあきらかになっている。

ところで、これら「オル系」・「テオル系」のいいかたは、各地でさまざまな音声変化をこうむり、多様な姿をみせるが、それらに関する報告は断片的で、具体的にどのような語形があるのか、また、それぞれの語形が、地理的にどのような分布をみせるのかについて、まとまった形で報告されたものはない。

本稿は、四国における「テオル系」アスペクト辞の、具体的な語形の地理的分布をあきらかにするとともに、それらの歴史的関係について考察するものである。

「オル系」の具体的な音声変化のようすとその分布は、本稿で述べる「テオル系」のものより、さらに複雑な様相を示すことが判明しており、紙幅の関係から本稿では触れないこととする。さらに、「オル系」アスペクト辞と「テオル系」アスペクト辞の間の、「進行」・「完了」という意味分担について、その枠組みが微妙に変化しつつあることが報告されているが(注2)、これについてもここでは触れない。

## 3. 「中学生」における分布

1986年度調査は、中学生とその祖父を話者とした。以下、それぞれを「中学生」・「老年層」と呼ぶこととする。まずここでは「中学生」の結果についてみていく。

1986年度第一次調査の調査表には、「テオル系」アスペクト辞のために、

『あその家は、毎晩、夜中まで電気がついている』という時に、『ついている』のところを『～』といういいかたはしませんか。

という質問文の『～』の部分に、

『ツイトル』	『ツイトー』	『ツイチョル』
『ツイチョウ』	『ツイチャー』	『ツイチュー』

の六種の語形を代入した六種の質問文が用意されており、それぞれには、

1. 私自身が、ふだん、家族との会話の中で使っている。
2. 私は使わないけれど、この町の人で、使う人がいる。
3. このあたりの人には使わない。聞いたこともない。

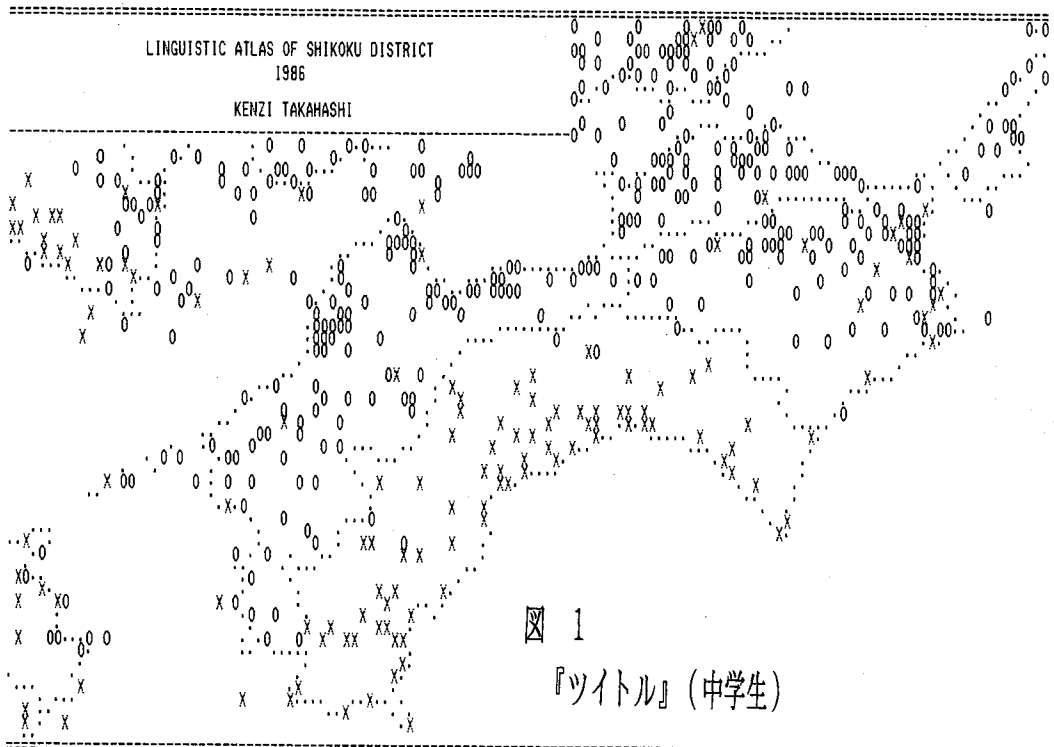
という三種の選択肢が準備されていた。

それぞれの語形の分布を見ていこう。

『ツイトル』[tsui toru] (図1)

1. 私自身が、ふだん、家族との会話の中で使っている。
2. 私は使わないけれど、この町の人で、使う人がいる。
3. このあたりの人には使わない。聞いたこともない。

という三種の選択肢のうち、ここでは、1の回答のみを「○」にし、2・3の回答を「×」の符号



にして地図化した。

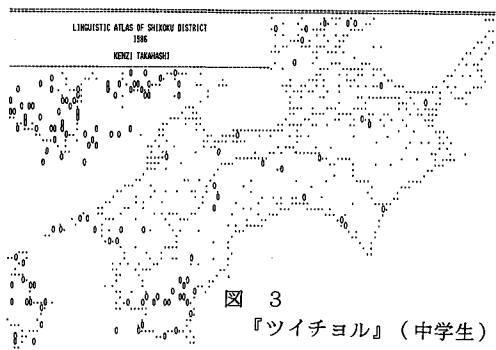
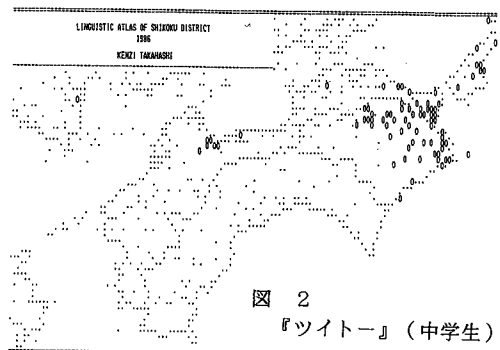
図1によると、『タイトル』は、この地図の西部と南部を除く広い地域に分布している。つまり、兵庫県・岡山県・広島県・山口県東部、さらに徳島県・香川県・愛媛県に広く分布しており、山口県西部・大分県・宮崎県、そして高知県にはまとまった分布が見られない。さらに詳しくみると、分布領域の中でも、徳島県と愛媛県南部には「×」の記号も散在していることがわかる。

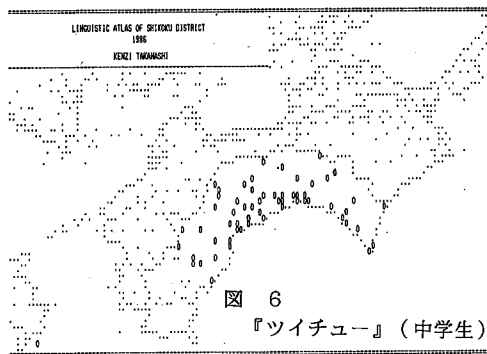
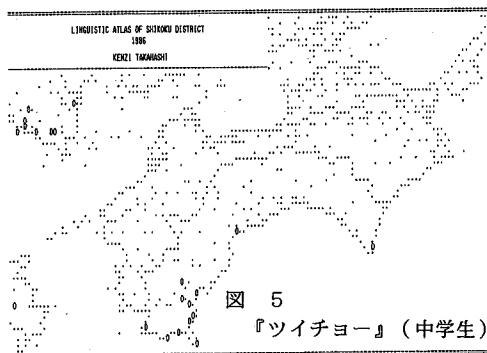
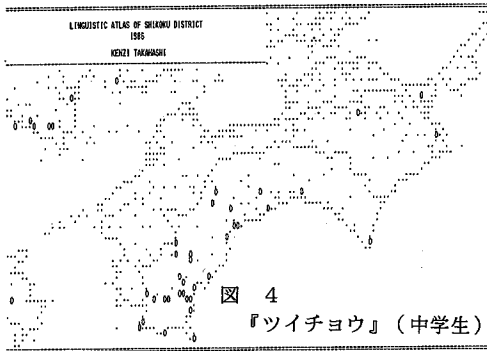
『ツイトー』 [tsui to:] (図2)

ここでは、「1、私自身が、ふだん、家族との会話の中で使っている。」の回答のみを「○」にし、2・3の回答は、海岸線・県境と同じく「・」にして地図化した(以下、本稿では特に断らない限りこれと同じ符号システムを使用している)(注3)。

『ツイトー』は、兵庫県淡路島から徳島県東部に大きな分布領域を示すとともに、愛媛県道前平野に狭いながら確実な分布をみせる。

『ツイチョル』 [tsui tjoru] (図3)





広島県・山口県・大分県・宮崎県,そして四国西部,つまり愛媛県佐田岬付近・高知県幡多地方にかたまった分布を示す。そのほか四国ではどちらかといえば山間部に,また岡山県にも散在する。

『ツイチョウ』[tsui tjou] (図4) (注4)

高知県西部の幡多地方から高知県中央部にかけて広がっていると同時に,山口県の一角にややかたまった分布をみせる。

『ツイチョー』[tsui tjo:] (図5) (注4)

高知県西部の幡多地方と山口県に分布する。

『ツイチュー』[tsui tju:] (図6)

高知県中・東部に広く分布する。

ところで,これらの各語形は「ツキ テ オル」からの音声変化の流れの中に,表4のように位置づけることができる。

1の変化は,動詞そのものにかかわる変化,すなわちカ行イ音便による変化である。

このようにして生まれた「ツイテオル」は,その中に含まれる二重母音 [eo] を回避するために2の変化を起こす。ここで大きく二つの道筋にわかれる。すなわち,一方では [e] 母音を脱落させ,「テオル」を「トル」とすることにより二重母音を回避するのに対し,一方では,拗音音節を採用することによって,つまり「チョル」とすることにより二重母音を回避するのである。この二つの方向を,以下『トル系』・『チョル系』と呼ぶことにする。

『トル系』について見ていく。「トル」は,さらに変化する。[r]音脱落の現象が起こるの

である。3の変化である。こうして「ツイトウ」が生まれる。しかし,この段階のものはおそらく存在しないと思われることから(注5),調査項目には入れていない。

「ツイトウ」は,さらに,その中に含まれる二重母音 [ou] を回避するために4の変化を起こす。

その結果「ツイトー」が生まれる。

表4			
{tsuki te oru}			
↓ 1			
{tsui te oru}	→	{tsui toru}      3	*      4
		{tsui tou}	→
	↘ 2		
		{tsui tjoru}	→
		{tsui tjou}	→
			6
			↘
			{tsui tju:}

『チョル系』について見ていく。2の段階で枝わかれして生まれた「ツイチョル」は,同じく[r]音脱落の現象が起こり「ツイチョウ」に変化する(5)。さ

らに「ツイチョウ」の中に含まれる二重母音〔ou〕を回避するために次の変化を起こす(6)。

ここで、「ツイチャー」の方向と「ツイチュー」の方向とに再び枝わかれをする。二重母音〔ou〕が長母音化するにあたって、〔o:]の方向と〔u:]の方向とに変化するのである(注6)。

調査した六種の語形は、以上のような変化過程の中に、このような形でそれぞれを位置付けることができる。

さて、この変化過程の中でもっとも大きな分岐点である2の段階を地図で確認することとしよう。調査項目のうち、

『ツイトル』(図1)                      『ツイトー』(図2)

は、2の段階で『トル系』への流れにおくべきものであるから、この二枚の地図を合成すれば『トル系』へ変化した地域が確定できる。

一方、

『ツイチョル』(図3)                      『ツイチョウ』(図4)

『ツイチャー』(図5)                      『ツイチュー』(図6)

は、2の段階で『チョル系』への流れにおくべきものであるから、この四枚の地図を合成すれば『チョル系』へ変化した地域が確定できる。

このようにして作成した地図が図7である。これによると『トル系』の方向へ変化するのは兵庫県・岡山県・広島県、また高知県を除く四国地方である。さらにその勢力は山口県・大分県東部にまで張り出している。一方、『チョル系』の方向へ変化するのは広島県・山口県・大分県・宮崎県と高知県である。さらにその勢力は愛媛県西部、つまり佐多岬から八幡浜市にかけての一带にまで張り出している。

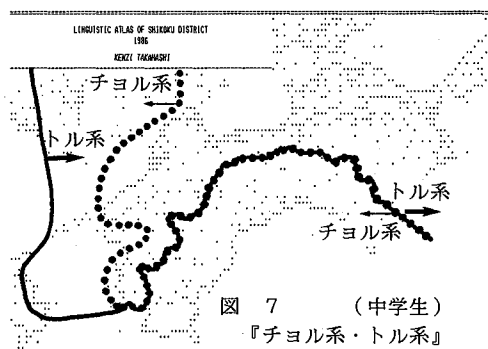
分布の重なる広島県・山口県東部・大分県東部・愛媛県西部はこの二つの勢力が混在・衝突している地域である。

この地域の方言で、「完了」を意味するアスペクト辞「テオル」は、2の段階で『トル系』・『チョル系』へと、以上のように大きく二つの方向へ分岐した。

「トル」に変化した地域の中で、図2に示した地域では、さらに3・4の変化が起こった。「トー」の分布である。

「チョル」に変化した地域ではさらに変化が起こった。つまり、おそらく、高知県全域でまず5の変化が起こり「チョウ」が成立した。その中で、西部の限定された地域では、6のうちの「チャー」への変化が起こり(図5)、また、中・東部で、6のうちの「チュー」への変化が起こった(図6)。図4には、「チャー」・「チュー」までへの変化が及ばなかった「チョウ」が残っている。

山口県の一部でも、5の変化が起こり、さらに6のうちの「チャー」への変化が起こっている(図4・5)。



#### 4. 「老年層」における分布

老年層でもまったく同じ調査項目を用意した。ここではその結果を見る。中学生の祖父を話者としたので、一世代を25年と考えれば、さきほど見たものより50年前の姿を示しているといえる(注

7)。

老年層の調査結果を、中学生でおこなったと同じような方法で『トル系』へ変化した地域と『チョル系』へ変化した地域にわけると図8のようになる。

図7と比較してみるため、図9に「中学生」と「老年層」での『トル系』に関する等語線を重ねて書いてみた。ここから、この50年間に『トル系』が西進しているようすを見ることができる。すなわち、山口県東部・愛媛県南部、さらに大分県東部が『トル系』に飲み

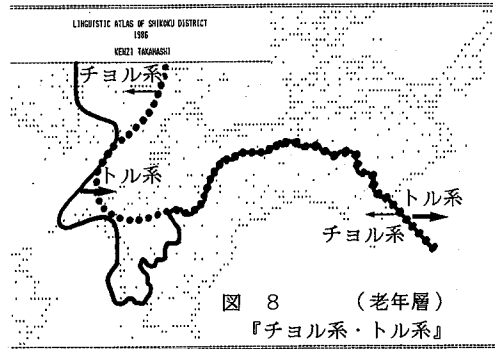


図8 (老年層)  
『チョル系・トル系』

込まれてしまったのである。

図10は、同じく『チョル系』の等語線を重ね合わせたものである。この50年間で、愛媛県南部から『チョル系』が大きく後退している(図中、1で示す地域)とともに、広島県では『チョル系』がわずかながら勢力を伸ばしている(図中、2で示す地域)。

『トル系』の中で、兵庫県淡路島・徳島県の多くの地域、さらに愛媛県東予市・丹原町あたりで「トル」は「トー」にまで変化していた(図2)。この「トー」は「老年層」では図11のような分布をみせる。両者を比較すると、この50年間で、徳島県ではわずかながら「トー」の領域が広がったのに対し、愛媛県ではむしろ退縮しているようすがわかる。これについては後に述べる。

『チョル系』で、「チョル」が「チョウ」・「チャー」・「チュー」に変化していく部分について見る。「中学生」についてはすでに図4・5・6で見た。「老年層」では、これらが図12・13・14のような分布をみせる。

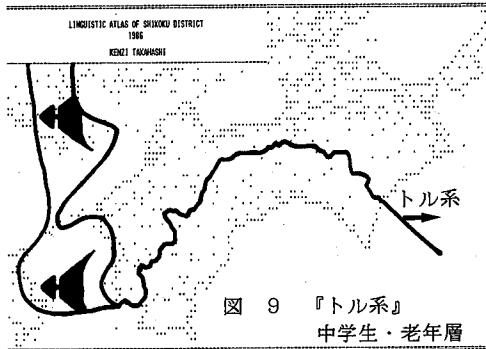


図9 『トル系』  
中学生・老年層

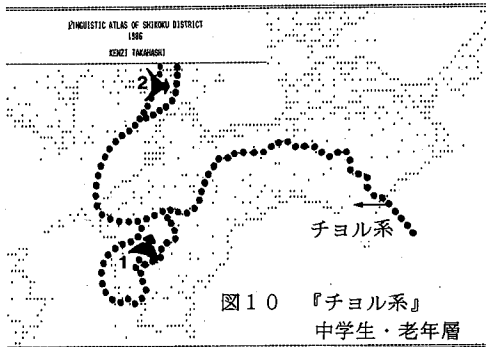


図10 『チョル系』  
中学生・老年層

「中学生」での分布から「チョル」が高知全県で「チョウ」になり、さらに、中・東部で「チュー」に、幡多地方の一部で「チャー」になったと考えたのであったが、「老年層」では、そういう方向への変化がまだあまり起こっていない。

中・東部の「中学生」で主流となる「チュー」は、ようやく県都高知市を中心として四周に広がり始めている段階であろうが(図14)、その基盤となると考えた「チョウ」は、中・西部でわずかに発生しはじめた段階である(図12)。幡多地方の一部で「中学生」に色濃くあらわれることになる「チャー」にいたっては、その地域にまだ発生していないのである(図13)。

こうなると、「チョル」が高知全県で「チョウ」になり、それから「チュー」と「チャー」とに分化していったとは考えられなくなってくる。表4で示した変化系統図は、純粋に言語内的な要因の

みから変化過程を考えたのであったが、分布はそれを支持しない。高知県東部には「チョウ」の形は「中学生」・「老年層」を通してそんなに多くは見られないのである。

ここでは、高知市内で「チュー」が「チョル」から一足跳びに、つまり「チョウ」を経由せずに成立し、それが県都高知市のことばであるという言語外的な威光により四周に広がったのであると考えた方が実態に合っているだろう。もちろんその時、ようやく高知市の西部で発生しはじめていた「チョウ」という形が意識下にあったかもしれない。

### 5. 地域共通語化

四国地方とその周辺部における「テオル系」アスペクト辞の、さまざまな語形とその分布、さらに、ここ50年間程度の各語形の消長について見てきた。

各語形の内的系統(歴史)関係は、既に表4で示したので触れないが、ここ50年間で起こった外的変化をまとめて考えてみる。

50年間で起こっている変化は、小方言区域の大方言区域化、すなわち、県単位での地域共通語の成立とまとめることができるのではないかと考える。

すなわち、

愛媛の『トル』

徳島の『トー』

高知の『チュー』

という、県単位の共通語が生まれてきた過程であると考えるのである(注8)。

一つ一つについてみていこう。

#### —愛媛の『トル』—

愛媛県は、もともと中・東部は『トル系』、南部は『チョル系』であった。そして、具体的な語形レベルでも、さまざまなバリエーションが観察された。これが今「トル」に統一されようとしている。県都松山市の「トル」が、地域共通語の資格で広がってきているのである。東予市・丹原町あたりに、広く薄く

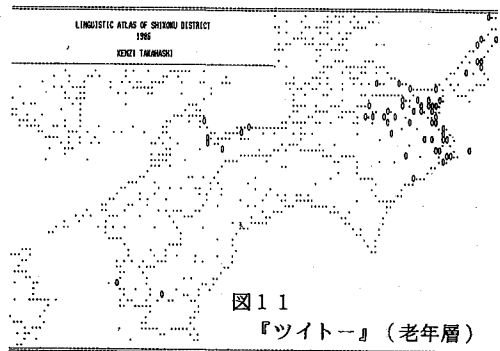


図11  
『ツイトー』(老年層)

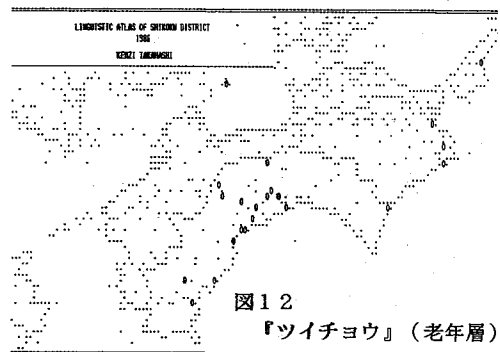


図12  
『ツイチョウ』(老年層)

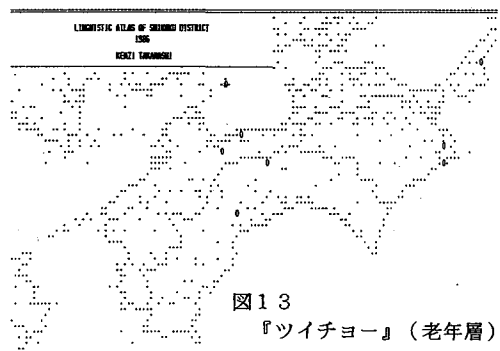


図13  
『ツイチャー』(老年層)

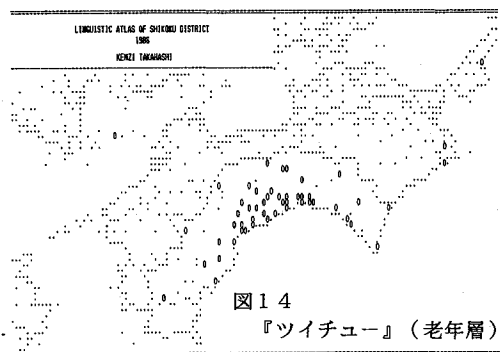


図14  
『ツイチュー』(老年層)

存在した「トー」が、「トル」におされて退縮してしまっているのも、このことを裏付ける。つまり、「トル」におされた「トー」が広く浅くから、狭く確実なものへと転換を図り、つまり戦線を縮小して、最後の砦として東予市・丹原町を死守していると考えられるのである。

——徳島の『トー』——

徳島県はずっと古く「トル」であったようだが、「トー」の侵入（おそらく兵庫県から淡路島を経由して）と、それによる県都徳島市の完全制圧により、ここでは「トー」が地域共通語の資格を持つことになった。現在は山間部へも侵略の機会をうかがっていると見ることができる。

——高知の『チュー』——

高知県は、もともと全域に「チョル」が分布していた。県都高知市では、それが一足跳びに「チュー」になり、中・東部を完全に征服してしまった。「チョル」から「チョウ」になり、さらに「チョー」になるという変化は、西部を中心に起こりはじめ「中学生」の段階で幡多地方に確実な足場を確保した。

ここでは、愛媛県・徳島県で見られたような、県都のことばが全県に及ぶということがない。県単位での地域共通語はまだ生まれていない。「高知」と「幡多」の言語基層の違いがあらわれていると考える。

図15は、「中学生」「ツイチュー」の項目で

2. 「私は使わないけれど、この町の  
人で、使う人がいる。」

を回答した話者のみを「○」にし、1・3の回答を「・」にして地図化したものである。これによると、幡多地方にも、すでに高知市の「チュー」が侵入し始めている。「中学生」たちが今後これを使用し始めるかどうかは彼らの帰属意識ともかかわり(注9)、県都高知市の威光が、はたして言語基層の違いという壁を乗り越えることができるのかどうか、今後非常に興味のもたれるところではある。

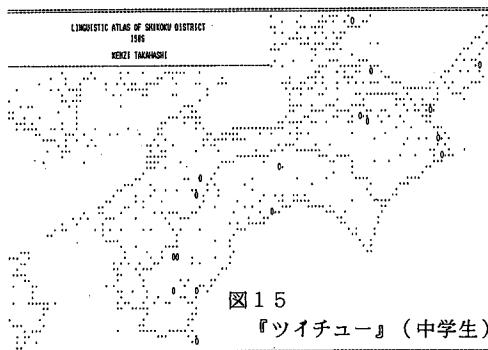


図15  
『ツイチュー』（中学生）

## 6. おわりに

1986年度調査をもとにして、四国とその周辺部における「テオル系」アスペクト辞の、さまざまな語形の分布をあきらかにした。さらに「中学生」・「老年層」の分布図を見比べることにより、この50年間で起こった各語形の消長についてもあきらかにした。所期の目的を達したことになっているが、アスペクト表現体系の分布確認と、その変化過程の再構という究極の目的からみれば、残されている問題点は多い。

「オル系」は、ここで見たものよりもさらに複雑な様相をみせるが、これについて本稿では触れられなかった。「テオル系」アスペクト辞と「オル系」アスペクト辞の間にみられる「完了」・「進行」という意味の枠組みの問題と、その微妙な動きについても今回は述べられなかった。

調査・研究方法における光明は確認し得た。つまり、従来の言語地理学的研究では、「臨地面接調査」が主流であり、それによってさまざまな地域の、きめのこまかい言語史が再構されてきた。筆者も、小稿で用いた「通信アンケート調査」という方法は一段劣る方法と考えていた。しかし、小



稿で見てきたように、きめの細かい調査表を作成することによって、このような方法でもかなりのことがあきらかにできることが判明した。

そういう方法を採用している「四国言語地図のための処理システム」は、現在ほぼ完成した。今後も、授業の一環としての調査、また、時をみて四国内全中学校へ向けての調査を実施していくつもりである。

### 注

- (1) 奨励研究 (A) : 「四国言語地図作成のための試験的研究」: 課題番号61710243
- (2) 拙稿「愛媛県松前町方言のアスペクト表現——ヨル・トルを中心として——」『日本語研究第2号』
- (3) このシステムのために開発した「地図化プログラム」では、符号があらかじめ各語形に設定されているのではなく、その場で、語形ごとに符号を設定することができるようになっている。したがって、「もぐらのしっぽ」的な地図解釈を、いわばコンピュータと対話しながら行うことができる。
- (4) 「チョウ [tjou]」と「チョー [tjo:]」との微妙な音声的相違を、このような形で語者に問うことの是非、つまり話者がそれを判断できているのかという問題が残る。通信調査の最も危険な部分だと考える。今回は、話者たちの素朴な判断にそのまま従った。  
 なお、臨地面接調査によると、高知県西部、幡多地方の若年層話者の中には、実際に「チョウ [tjou]」と発音し、また、意識の上でも、はっきりと [ou] という二重母音ととらえている者が多い。徳島県出身者からは「チョウ [tjou]」を聞いたことはない。徳島県に分布する「チョウ [tjou]」(図4)は「チョー [tjo:]」の可能性もある。逆に、幡多の「チョー [tjo:]」(図5)には「チョウ [tjou]」が混入している可能性がある。
- (5) 『トル系』の地域では、二重母音 [ou] は [o:] に変化してしまっており、[ou] のまま留まっている地域はないと判断した。
- (6) 二重母音 [ou] が長母音化するにあたって [u:] となるのは、九州方言の特徴とされてきた。四国は、[o:] となるのが普通で、[u:] となるのは少ない。しかし、高知県中・東部では「オル系」アスペクト辞も、「タベ+オル」が「タベユー」となり、やはり [ou] が [u:] になっている。
- (7) 言語形成期に50年程度のひらきのある人たちの、1986年時点での差であり、厳密に50年間でのことばの差とは言えない。
- (8) さきにみた『チオル系』の広島県内における動きも(図10における2の部分の変化)、広島県という地域の地域共通語として、『チオル系』のいいかたが若年層に広がったのだと考えることができる。
- (9) 愛媛県の高知県境近くに見られる「○」の話者の中の一人は、「高知県のことばだ」と回答用紙に書き加えてあった。このいいかたから、彼は、明確な愛媛県への帰属意識を持っていることがわかる。この話者は、こういう意識でいる限り、今後も使い始めることはないだろうと思われる。

### 参考文献

- 国立国語研究所 (1979) 『表現法の全国的調査研究——準備調査の結果による分布の概観——』  
 辰浜マリ子 (1977) 「相生方言のアスペクト——「居る」・「て居る」について——」『都大論究』第14号  
 高橋頭志 (1979) 「愛媛県松前町方言のアスペクト表現——ヨル・トルを中心として——」『日本語研究』第2号  
 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 (1982) 『講座方言学8 中国四国地方の方言』国書刊行会  
 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 (1983) 『講座方言学9 九州地方の方言』国書刊行会  
 工藤真由美 (1983) 「宇和島方言のアスペクト」『国文学 解釈と鑑賞』48-6  
 井上文子 (1989) 「紀伊半島海岸部方言におけるアスペクト表現——イル・オル・アルに焦点をあてて——」『日本学報』第8号  
 柳田征司 (1990) 「近代語の進行態・既然態表現」『近代語研究』第8号

(1990, 11, 10稿)